



Title	言語活動従事に関与している知識は何か : バフチンの対話論の視点
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2012, 16, p. 51-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50749
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語活動従事に関与している知識は何か

－ バフチンの対話論の視点 －

西口 光一*

要 旨

本稿では、バフチンの初期の著作における「ことばのジャンル」、「シナリオ」、「セリフ」、「言語＝ことば」という概念を手がかりとし、ホール (Hall, 1993, 1995) の議論を解釈枠として、言語活動従事に関与している知識というものをバフチンがどのように考えていたかを検討した。その結果、特定の種類の言語活動＝実践に従事することに関与している知識はことばのジャンルであること、ジャンルは沈殿した歴史的意識を内包するプロトタイプのな言語行使の集合であること、ジャンルを「発話の全体を構築するための比較的に安定した一定の定型的形式」などのように実体のあるもののように説明するのは観察者視点に基づく見方であること、などが明らかになった。言語現象はイデオロギー的現象であるので、第二言語教育においてもジャンルに正当な関心を向けなければならないというのがバフチンからの第二言語教育者へのメッセージである。

【キーワード】バフチン、対話原理、ことばのジャンル、ジャンルのリソース、プロトタイプのな言語行使

はじめに

ソシュールの言語観を基礎とする現代言語学を「ラングの言語学」とするならば、バフチンの言語学は「発話 (ディスクール) の言語学」(桑野, 2002, p.64) と呼ぶのがふさわしいであろう。つまり、ソシュールが体系としての言語に関心を向けているのに対し、バフチンはイデオロギー現象として言語を捉えようとしており、ソシュールのように言語活動 (ラングーージュ) からラング (langue) を抽出してその抽象的な対象を研究するのではなく、一貫して現実の言語である発話のあり様を研究の対象としているのである。ゆえに、より詳しく言うならば、バフチンの言語学は「＜イデオロギーに関する学＞としての＜記号に関する学＞」あるいは「イデオロギー学としての記号学」(桑野, 2002, p.11) となる。

バフチンが繰り返し論じているように現実の発話と

いうのは唯一的なものであり一回性のものである。そうした発話についての議論の中でバフチンは、「ことばのジャンル (rechevoy zhanr)」、「シナリオ (scenariy)」、「セリフ (replika)」、「言語＝ことば (yazyk-rech)」などの用語を用いて言語についてあるいはそれらと相互行為や発話との関係について論じている。本稿では、このようなバフチンの概念を手がかりとし、ホール (Hall, 1993, 1995) の議論を解釈枠として、言語活動従事に関与している知識というものをバフチンがどのように考えていたかを検討する。そして、そうした議論を通して、バフチン言語学の中心点である対話 (dialogue) や対話性 (dialogicality) を改めて確認すると同時に、バフチン言語学を第二言語教育学の基礎理論へと架橋する道筋の端緒を示したいと考えている。

*大阪大学国際教育交流センター教授

1 研究課題

1-1 言語=ことば (yazyk-rech、language-speech)

ソシュールの言語学との対照で自らのイデオロギー学としての言語学を主題的に論じている『マルクス主義と言語哲学』（バフチン、1929/1980、以降『マル言』と略す）で、言語活動に従事する言語主体が関わっている知識についてバフチンは次のように議論している。まずは、語る主体について。

語る主体の意識は、規範として自己同一的な諸形態の体系（system of normatively identical forms）という形で、言語を操作するわけではありません。…語る主体にとって重要なことは、規範として自己同一的な諸形態（さしあたりそうしたものが実在すると仮定しておきます）を、ある具体的な脈絡のうちで適用〔運用〕することだからです。彼にとっての関心の重心は、諸形態の自己同一性にはありません。同一の諸形態が、ある具体的な脈絡のなかで獲得する、ある新しい具体的な意味にあります。…彼にとって重要なのは、ある言語形態が所与の具体的な脈絡〔状況の脈絡と言語化された脈絡〕のなかに登場することを許容するような側面です。所与の具体的な状況の中で言語形態が〔状況に〕ふさわしい記号となりうる側面です。…語る主体にとっては、言語形態が自らの関心事となるのは、常に自己に等しい不変の信号（シグナル）としてではなく、常に変わることの可能な、しなやかな記号としてであると。（『マル言』pp.140-141、太字は原著で傍点は筆者、以下バフチンの著作については同様）

続いて、聞き手の関心あるいは聞いて理解することについて次のように論じている。

〔発話を〕聴き、理解するということの基本的な課題は、話し手が用いた言語形態を、信号として〔同一の〕形態として意識すること — 例えば、まだ十分に馴染みのない信号とか、よく知らな

い外国語の語形とかは、かえってはっきり、それとして意識するわけですが、— そういうことにあるのではありません。発話を理解するという課題は、基本的には〔語り手によって〕、用いられた形態をそれとして認知することではありません。その形態を、所与の具体的な脈絡の中に置いて理解すること、所与の発話のなかで当の形態がもつ意味を理解することにありまゝです。その形態の用いられ方の新しさを理解することであって、その同一性を再認することではありません。いいかえると、聞き手の場合も、〔話し手と〕同一の言語共同体に属するなら、その志向は、不変で自己同一的な信号としての、ある所与の言語形態にではなく、変わりやすいしなやかな記号としての言語形態に向けられる、ということです。（『マル言』pp.141-142）

そして、最後に両観点からの議論をまとめる形で以下のような論を提示している。

語る者の言語意識も聴き理解する者の言語意識も、規範として自己同一的な言語形態の抽象的な体系に関わってはおりません。それらの言語意識が関わっているのは、ある所与の言語形態を使用しうるすべての脈絡の総和という意味での言語活動（yazyk-rech、筆者注）です。単語は、自国語を語る者にとっては、辞書の中の単語としてあるものではありません。それは同じ言語共同体の成員A、B、Cなどが発する極めて多様な発話の中の語、そして自らが発する、同じく極めて多様な発話の中の語という形で実在するものです。（『マル言』pp.144-145）

引用中の「言語活動」という用語はロシア語の原語である“yazyk-rech”とは必ずしも対応しておらず、もう一つの邦訳（桑野訳、1988）での「言語=ことば」のほうがロシア語に並行的に対応しているので、以降の議論では“yazyk-rech”に対応する用語として「言語=ことば」を使うこととする。そうすると、バフチンの論においては、言語=ことば（yazyk-rech）こそが言語活動に従事する話し手や聞き手の

意識が関わっているものとなる。

では、この言語＝ことばとは一体何なのであろうか。

1-2 シナリオ (scenariy) とセリフ (replika)

バフチンは『マル言』より3年前に出版された「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」(バフチン, 1926/2002、以降「生活の言葉」と略す)でイデオロギー学としての記号学を初めて明示的に展開している。同論文はバフチンが初めてその独自の芸術交通論を打ち出したものである。芸術交通論とは、芸術、より具体的には文学を、人と人との間で行われるイデオロギー的交通という現象の一形態として捉えようとする見方である¹。同論文においてバフチンは、日常生活の言葉遣いの中に言葉の社会的本質がくっきりと明瞭に出ており、発話と周囲の社会的環境との結びつきが分析しやすくなっている(「生活の言葉」p.16)とし、芸術交通論を理解するための基礎として生活の中の言葉を考察している。そして、そうした考察の中でバフチンはシナリオ (scenariy) という概念を提出している。

言葉とは、ある出来事の「シナリオ」のようなものである。言葉の総体的意味を生き生きとしたかたちで動的に理解するには、話し手たちの相互作用というこの出来事を復元し、いわば再びそれを「演じ」なければならないのであり、その際、理解者は聞き手の役割を引き受ける。だが、この役割を果たすためには、理解者は他の参加者たちの立場も明確に理解していなければならない。(「生活の言葉」pp.31-32)

そして、このシナリオの概念を仲立ちとして生活の中の言葉と詩の中の言葉を結びつけているのである。

詩においても言葉は出来事の「シナリオ」であって、通の芸術受容者はそれを演じるのであり、言葉やその結合形式のなかに、作者とその作者が表象している世界との生きた独特の相互関係を敏感に見抜いたり、第三の参加者 — 聞き手 — としてこの相

互関係のなかに入ったりする。言語学的分析は言葉と、その抽象的契機(音声学的・形態論的・統語論的その他の契機)間の相互作用しか見ないところに、生きた動的な芸術的受容や具体的な社会学的分析の場合は、(言語的素材のなかに反映され留められているにすぎない)人びと間の関係が明らかにされる。言葉とは、創造的受容の過程においてのみ、またしたがって生きた動的な社会的交通の過程においてのみ、肉づけされる骨格なのである。(「生活の言葉」pp.38-39)

一般にシナリオというのは個々のセリフによって構成されるわけだが、同論文ではセリフという概念や用語は現れない。一方、3年後の『マル言』ではシナリオについての論述がない反面で、セリフの概念が使われている。以下の引用は、バフチン言語学の中核概念である対話原理と深く関連する能動的理解を説明した有名な一節で、傍点の部分がロシア語ではセリフ (replika) となっている。

あらゆる真の理解は、しかし〔受動的な理解ではなく〕能動的なものです。答えの胚芽をはらんでいけるものです。テーマを捉えうるのも、能動的な理解だけです。生成しているものを捉えうるのは、自らも生成しつつあるものだけです。他人の発話を理解するということは、その発話に対して一定の方向〔位置〕決定をするということ、それに対して然るべき脈絡の中で、然るべき位置を見い出してやるということを意味します。理解すべき発話のひとつひとつの言葉の上に、私たちは自らの一連の答える言葉を、いわば積み重ねるわけです。答える言葉が多くなればなるほど、また、それらが重要なものであればあるほど、理解はより深いものとなり、より本質的なものとなります。このようにして、発話の個々の析出しうる意味要素と、発話全体とが、〔理解の過程で、発話が発せられた脈絡とは〕別の能動的に応答しようとする脈絡の中に移し入れられるのです。あらゆる理解が、対話性をもっているものです。発話と理解とは、対話における一方の言葉とそれに対

する他方の応答と同じ関係にあります。理解は、相手の言葉に対し、**対抗の言葉**とでもいうべきものを探し出そうとするものです。(『マル言』 pp.226-227)

1-3 ことばのジャンル (rechevoy zhanr)

一方、『マル言』では、シナリオについての議論はないが、それに代わるようにことばのジャンル (rechevoy zhanr、『マル言』では「発話ジャンル」) の話が登場する。

永続的な日常の状況であれば、いずれもそれぞれに特有の仕方で組織された聴衆というものを持ち、従って、日常的な小ジャンルの一定のレパートリーを持っているものです。日常の**発話ジャンル**は、どこでも、それぞれのジャンルに割りふられた社会的コミュニケーションの河床〔チャンネル〕の中に収まるようになっております。それによって、この河床の**類型・構造・目的・社会的構成**などのイデオロギイ的表現となるのです。日常の発話ジャンルは、社会的な環境 — 祭日・余暇・ホテルでの接触・工場での交際など — の一部です。それは、こうした社会的状況と接触し、状況によって限定され、その**内的契機**の全てにわたって状況によって規定されております。(『マル言』 p.214)

同書でのことばのジャンルに関する議論はこの引用及びその前後に限られている。そして、それらの論述ではことばのジャンルとは何なのかが分明には理解できないくらいがある。ことばのジャンルの詳細な議論についてはわれわれはその20余年後に書かれた『ことばのジャンル』(バフチン, 1952-53/1988、以降『ジャンル』と略す)を待たなければならない²。以下は同書の冒頭にあることばのジャンルを説明した有名な一節である。

人間のさまざまな活動領域のすべてが、言語の行使とむすびついている。この言語の行使がもつ性格や形式は、人間の活動領域とおなじく種々さまざま

なのが当然で、このことは、もちろん、国民全体にとって言語が単一であることと少しも矛盾しない。言語の行使は、人間のあれこれの活動領域の参加者たちの、個々の具体的な発話(話しことばならびに書きことばの発話)のかたちで実現される。これらの発話は、それぞれの活動領域の特殊な条件と目的を、テーマ内容や言語のスタイルに反映しているだけではない。つまり、語彙、句法、文法的手段の選択によって反映しているだけではない。なによりもまず、[発話の]構成に反映しているのである。テーマ内容、スタイル、構成というこの3つの要因は、**一個の発話**のうちで不可分にむすびついており、いずれもひとしく当のコミュニケーション領域の特性に規定されている。個々の発話は、もちろん、どれも個性的なものだが、しかし**言語の行使のどの領域も、われわれがことばのジャンルと呼ぶところの、発話の相対的に安定した諸タイプをつくり上げているのである**。ことばのジャンルの豊富さ、多様さには限りがない。というのも、多岐にわたる人間の活動の可能性はくみつくしえないものであって、それぞれの活動領域がことばのジャンルの一定のレパートリーをもち、このレパートリーは、当の領域が発達して複雑になるにしたがって、分化し成長するからである。(『ジャンル』 pp.115-116)

では、最初に挙げた言語=ことばと、シナリオとセリフ及びことばのジャンルはどのように関わっているのであろうか。ホール(Hall, 1993, 1995)はそれを検討するための有用な解釈枠を提供してくれている。次節では、ホールの議論を丁寧にとどめてみよう。

2 ホールにおけるバフチンの対話論とジャンル

2-1 口頭実践とスピーチ・イベントとジャンルの要素

バフチン言語学を第二言語教育の基礎理論として応用することを目指すホールは1993年の論文(Hall, 1993)で、われわれが生活の中で行っている口頭実践(oral practice)というものを次のように説明し

ている。

Oral practices are culturally-mediated moments of face-to-face interaction whereby a group of people come together to create and recreate their everyday social lives. In this interactive process, the participants, as members of a group, collectively take and share meaning from the environment, thereby co-creating, confirming and/or modifying their social history, their interpersonal relationships, and their individuality (Cronen, Pearce, and Harris 1982; Connerton 1989). These practices are linguistically and paralinguistically instantiated and culturally conventionalized. Communicating meaning in an oral practice depends upon the group members' *shared understanding of the tools used in the instantiation of the practice* and the contexts in which it occurs. It is the conventionality of the means by which the practices are realized that binds the participants to some degree to particular ways of realizing and/or modifying their collective history. (Hall, 1993, pp.145-146、斜体は筆者)

本稿の議論に関わって注目されるのは後半の “These practices are ...” 以降であり、その中でも斜体の部分である。まずは、後半を分かりやすく翻訳してみよう。

口頭実践は、言語的及び言語随伴的に一つの事例として実現されており、文化的に慣習化されている。口頭実践において意思の疎通ができるのは、集団メンバーのみんなが当該の実践を一つの事例として実行するときに行使するツールとそのツールが現れるコンテキストの両方を熟知しているからである。参与者たちが関わっている具体的な集団としての歴史を実現したり修正したりする特定の仕方に参加者たちを一定程度束縛するのは、当該の実践が実現され

たときに行使された手段が慣習性をもっているからである。(傍点は前掲引用の斜体部)

ここでホールは、口頭実践で行使されるものを概略的にツール (tool) あるいは手段 (means) と呼んでいる。

続いてホールは、自身の言う口頭実践とハイムズのスピーチ・イベントを対比的に論じる。ハイムズのスピーチ・イベントとは「参与者たちが当該の出来事に持ち込んだ共有的な社会的知識によって慣習になっている話の仕方であり、それは同時に具体的な出来事の産出を慣習に従ったものにする」(Hall, 1993, p.146)。ゆえに、口頭実践はスピーチ・イベントと、分節化のための言語的及び言語随伴的なリソースつまりジャンルの要素の集合 (a set of linguistic and paralinguistic resources (i.e. generic elements) for their articulation) によって枠付けられた、時空間的に制約された対面的な契機 (face-to-face spacio-temporally-bounded moments)³のことを議論している点で類似している。また、そのリソースあるいはジャンルの要素の知識はその社会文化的集団のメンバーの間で共有されており、メンバーが自身の実践への参加を枠づけるときに援用すると見る点でも両者は類似している。スピーチ・イベントという概念は、言語行使というのは、集団のメンバーが共有し実際の相互行為に持ち込む社会文化的な知識と、相互行為のセッティング、会話に従事する参与者、相互行為が行われる目的などの社会文化的に規定される要素とに分離しがたく結びついていると主張する形で、社会的集団のメンバーたちが相互行為を実践する諸契機を巧みに捕捉している、とホールは評価する。ゆえに、

Oral practices then are speech events; they are socioculturally conventionalized configurations of face-to-face interaction by which and within which group members communicate. (Hall, 1993, p.146、斜線は筆者)

となる。そして、この部分では先のツールや手段に対応するものを分節化のための言語的及び言語随伴的な

リソースあるいは分節化のためのジャンルの要素と呼んでいる。そして、それらは「集団のメンバーが共有し実際の相互行為に持ち込む社会文化的な知識」であると論じている。われわれは、ここでホールがリソースあるいはジャンルの要素の「集合 (a set of ...)」という言い方をしている点に注目しておかなければならない。つまり、特定の相互行為実践に関連する社会文化的知識を要素の集合として捉えているのである。

2-2 口頭実践とバフチンの対話論

ホールは口頭実践とスピーチ・イベントを同じものと見ているわけではない。ホールの議論はバフチンの対話論へと進む。

テキストの概念は、実践の概念と最も密接な関係にある。バフチン (Bakhtin 1986; cf. Holquist 1990) は、テキストとはジャンルの形態 (generic forms) と個人のスタイルが交わり合う局所的に状況づけられた契機であると説明している。(Hall, 1993, pp.146-174、斜線は筆者)

そして、バフチンのジャンルについての議論を確認した上で、実践 (あるいはバフチンのテキスト) とハイムズのスピーチ・イベントとは重要な違いがあると指摘する。

まずは、バフチンのジャンル (genre) についての確認である。

ジャンルというのは、実践から生まれた抽象物あるいはプロトタイプ的な要素の諸集合 (sets of abstractions or prototypical elements which emerge from practices) であり、同時に個別・具体の実践を制約するという形で実践と関連している。バフチンの説明では、ジャンルは実践が発達する中で最も安定化した要素 (the most stable elements in the development of a practice) によって構成されるものであり、それらの要素は実践で繰り返し行使されることを通して安定し維持されるものとなっている。別の言葉で言うと、ジャンルは実践を構成

し、実践によって構成される。(Hall, 1993, p.147、傍点は筆者)

そして、実践とスピーチ・イベントの違いについて次のように論じている。

There is a relationship of dynamic tension that is assumed to exist between a practice and its *generic elements*. This assumption moves beyond a formalist view of speech events in which it is implied that genres are the more stable, authoritative versions, and that the actualizations of genres, the events themselves, are simply the more variable, and therefore less theoretically interesting versions. Such a distinction does not hold between the concepts of genre and oral practice as I use them here. Instead, the two exist as inextricable, yet dynamically interactive links in the larger conceptual unit of dialogue (Bakhtin 1986). (Hall, 1993, p.147、斜体は筆者)

この部分でホールは、スピーチ・イベントというのは形式主義的な見方で、その見方ではジャンルあるいはジャンルの要素は安定した権威的なもので、その一方でそれらの具現つまり実際の出来事そのものは端的に可変的でそれゆえ理論的にはそれほど興味が向けられないものとなる、と論じている。しかし、バフチン的な見方である実践では、両者の間にはそのような区別はなく、むしろジャンルあるいはジャンルの要素と実践の間には動的な緊張関係があるとホールは論じている。つまり、バフチンの対話論では、最後の文にあるように、両者はダイアログという上位の概念単位の下の分離しがたい動的に相互に作用し合う結びつきとして存在するのである。つまり、バフチンの言うダイアログとは、実践によって構成され実践を構成するジャンルの側面とジャンルによって構成されジャンルを構成する実践の側面という両側面を分離しがたい形で同時に持つ動的な現象なのである。

ところで、われわれは、ホールがここでもジャンルのことを「実践から生まれた抽象物あるいはプロトタイプ的な要素の諸集合」という言い方をしていることに注目しなければならない。

2-3 言語的交通の成立と意味

続いてホールは、言語的交通が成立する基盤と意味の問題について議論している。

ホールによると、バフチンの視点による口頭実践の研究対象は、相互行為の参与者が行使するジャンルの要素の歴史的性質が具体的な状況で相互行為を遂行することと接触してそれに織り込まれる部分 (the point at which the historical nature of the generic elements used by the participants to engage in interaction meets and becomes entwined in the locally situated accomplishment of the interaction) となる。例えば、わたしたちは家族のメンバーとして、ひとまとまりの相互行為のための言語的及び言語随伴的なジャンルの要素、Lave(1988)では構造化リソース、を共有しており、家族の食事という実践にそれらを持ち込む。そのようなリソースの用法とそれに付随する意味は一定程度慣習化されており、わたしたちがそうした慣習的なリソースをよく知っているから、そして現にそれを使っているという事実があるから、わたしたちは自身をその家族の実践に従事している者として同定することができるのである。わたしたちは具体的な実践にそうしたリソースを援用するわけだが、食事の最中の特定の相互行為の契機でわたしたちが実際にリソースをどのように行使するかは一定程度具体的な状況的契機に依存することになる。だから、行使されたリソースの実際の意味は、その実践に従事している特定の人々が特定の契機でリソースをどのように行使するかによって決まるのである。

ホールは、バフチンの対話性 (dialogicality) の概念は、実際の実践のあらゆる契機に存在する緊張関係をうまく表現していると指摘している。その緊張関係というのは、わたしたちが相互行為に持ち込む言語的及び言語随伴的なリソースの社会歴史的で慣習的な性質と、具体的な実践の中でそのようなリソースが実際

の現場の状況に即して創発的に行使されることとの間の緊張関係である。そして、そのような緊張関係の中で実践のリソースは、一つの水準では当の実践に従事する人々に意味をもたらし、同時に別の水準では、実践に従事する人々によって使われて新たな意味を創り出すのである (Hall, 1993, p.147)。ホールによると、Hanks (1989) はこのような実践のリソースのヤヌス (ローマ神話の両面神、筆者注) 的な性質をメタ相互行為的機能⁴と説明している。つまり実践のリソースは一面で具体的な現場の行為遂行に関わりながら、もう一面でその行為遂行の慣習的で歴史的な側面を表示していると、いうことである。

2-4 ジャンルのリソースと発話

ホールは、2年後の1995年の論文 (Hall, 1995) の中で、上の議論をジャンルとジャンルのリソースを中心に再編した議論をしている。同論文での相互行為実践 (interactive practice) は先行論文の口頭実践に対応する。

わたしたちが相互行為実践に参加するときに影響を与える知識領域の一つは、ジャンルの相互行為リソース (generic interactive resources) で構成されている。それらの具体的な集合体は、プロトタイプ的な言語行使 (protopotypical uses) あるいは一定のパターンに整序された言語行使 (patterned regularities of use) の集合、あるいはバフチンが「出来事の結晶化 (crystalization of events)」と呼ぶもの (Morson and Emerson 1989, 1990) である。それらは、典型的な相互行為実践と典型的なテーマに対応しており、関連する実践の蓄積された歴史的な諸側面を内包している。つまり、特定の相互行為者集団による過去の具体的な状況の諸契機で実際に行使されることを通して言語行使の習慣性が作り上げられていて、そうしたリソースの集合は各々特定の世界観つまり「価値判断、状況の定義、起こりうる行為の意味などの複合体」(Morson and Emerson 1989: 22) を発達させている。そして、そのような沈殿した歴史的な意味や心的態度をあら

はじめ染み込ませて、われわれの実際の相互行為の契機にやってくるのである。(Hall, 1995, p.208、筆者訳)

この部分でホールは、ジャンルの存在形態をプロトタイプ的な言語行使（あるいは一定のパターンに整序された言語行使）で構成される知識領域（sphere）というふうに特徴づけている。そして、わたしたちが言語活動に従事するときにはいつでも、沈殿した歴史的な意識を染み込ませたそのようなリソース群がホログラムのようにやってきて現下の言語活動従事の契機を規定すると説明している。そして、対面的相互行為従事に特に関連し同時にさまざまな取り合わせでその集合体つまりジャンルを成している要素としては、「語彙と統語の選択、参与構造、行為シーケンス、会話の開始ムーブや移行ムーブや終結ムーブを合図する韻律の型とその他の定型表現などの対面的相互行為に必須の言語的及び言語随伴的に事例化されたリソースがある」(Hall, 1995, p.208) と述べた上で、そうしたリソースと発話の関係について声の概念と関連づけて、

具体的な契機でわたしたちがそうしたリソースを行使したとき、それは当該の契機の諸条件への具体的な応答（concrete responses to the conditions of the moment）つまりバフチン（Morson and Emerson 1990）が発話と呼ぶものとなる。そして、そうした応答をするとき、わたしたちは利用可能なリソースの慣習的な意味を援用して自分自身の声を作り上げる、つまり腹話術をする（ventriloquating, Wertsch 1991）のである。(Hall, 1995, p.208、強調は原著、筆者訳)

と論じている。つまり発話とは、言語活動従事者の現下の発現途上にある意識が歴史的な意識を内包するプロトタイプ的な言語行使と出会って、形象と歴史的及び唯一的な意味を獲得した瞬間であり、そうした存在なのである。そして、言語活動従事に関与している知識について言うと、要するにわたしたちはイデオロギー

が染み込んだプロトタイプ的な言語行使というリソースを援用して発話を生成したり受容したりしているということになる。

3 ホログラミックな社会歴史的リソースとしてのジャンル

3-1 バフチンにおけるジャンルとシナリオと発話

バフチン自身の議論に戻ろう。バフチンは、ジャンルと発話について次のように論じている。

われわれは一定のことばのジャンルでもって話す。つまり、われわれの発話はすべて、〔発話の〕全体を構築するための比較的に安定した一定の定型的形式をもつ。われわれは話しことば（ならびに書きことば）のジャンルの豊かなレパートリーをもつのである。…われわれは多様なジャンルで話していながら、それらのジャンルの存在には少しも疑問を抱かない。ごく自由なうちとけた会話にあつてすらも、われわれは自分のことばを、一定のジャンル形式にしたがつてつくり上げているのである。それは月並みな紋切り型の形式のこともあれば、より柔軟で可塑性をもつ創造力に富んだ形式のこともある（日常のコミュニケーションも創造的なジャンルをもつ）。(『ジャンル』 pp.148-149)

また、シナリオについては、1・1で引用した「生活の言葉」の翌年に出版された『フロイト主義』（バフチン, 1927/1979、以降『フロイト』と略す）で、再度議論している。同書は、フロイトの精神分析をバフチンの社会学主義の観点で批評した著作で、以下の引用もそのような文脈において論じられているものであるが、発話（以下の引用では「言表」と訳されている）とシナリオ（以下の引用では「脚本」）の関係についてのバフチンの考えを提示していると見ることができる。

いかなる言表も、この言表の発言者のみに帰属させることはできない。というのは、言表は発言者たちの相互作用の産物、広義には、この言表が発せら

れたあの複雑な社会的状況全体の産物なのである。…言語とその諸形式は、所与の言語グループの持続的、社会的交流の産物である。言表はそれを基本的には出来合いのものとして見出すのである。それは、言表の材料であって、言表の可能性を限定する。また、ほかならぬ所与の言表を特徴づけるもの、たとえば一定の語の選択、句の一定構造、言表の一定のイントネーション — こうしたもののすべては、話し手と、会話が生じるあの社会的状況の間の相互作用の表現なのである。我々はこの言表のなかに話し手の「精神的体験」の表現を認めようとしたがるが、…それは一種特別な「投影」であって、この投影によって我々は社会的相互関係の複雑な総体を「個人の心」に挿入（投影）するのである。言葉は、その過程において言葉を生み出したあのもっとも身近な交流のいわば「脚本」であり、この交流はというと、それは、話し手が所属しているあの社会的グループの、より広範な交流の要因なのである。この脚本を理解するためには、あのすべての複雑な社会的相互関係を再現しなければならない。所与の言表とは、これらの社会的相関のイデオロギー的屈折である。（『フロイト』pp.150-151）

ここで「発言者たちの相互作用の産物」、「社会的状況の産物」、「所与の言語グループの持続的、社会的交流の産物」、「脚本（シナリオ）」と言う場合、バフチンはジャンルやジャンルのリソースに言及しており、それらは実践を通して歴史的に構成されるもので、言語活動従事者はそれらを「出来合いのもの」や「言表の材料」として利用すると論じているのである。理解者の方も自身に向けられた発話を理解するためには「あのすべての複雑な社会的相互関係を再現しなければならない」ということになる。ただし、この部分は、最初に注釈したように、精神科医と患者とのやり取りも通常の意味での相互行為の一種であるとの趣旨の議論であることに留意しなければならない。

これに対し、1-2の最初の2つの引用部では芸術的交通についての議論の中でシナリオという概念が使われている。すなわち、客観的な存在物であるテキスト

が通の芸術受容者との芸術的交通の過程に置かれると、テキスト＝シナリオは肉づけされ、作品として鑑賞されるのである。同じ「シナリオ」でも、対面的な相互行為の場合と芸術的交通の場合はシナリオとしての性質が異なってくるわけである。

3-2 ジャンルとシナリオとセリフ

以上の議論を踏まえて、われわれは言語活動従事に関与している知識をめぐって次のようにまとめることができる。

- (1) 特定の種類の言語活動＝実践に従事することに関与している知識は、ジャンルである。
- (2) ジャンルは、沈殿した歴史的意識を内包するプロトタイプ的な言語行使の集合である。
- (3) ジャンルは、発話の全体を構築するための比較的安定した一定の定型的形式あるいはプロトタイプ的な言語行使、さらには前項での引用のように「発言者たちの相互作用の産物」、「社会的状況の産物」、「所与の言語グループの持続的、社会的交流の産物」、「出来合いのもの」、「言表の材料」というふうに実体があるもののよう説明されることがある。しかしそれはあくまで観察者視点（etic-perspective）に基づく捉え方である⁵。ジャンルは本来的には実体的なものではなく、言語活動従事の契機において言語活動従事者が過去の経験に基づいてホログラム的に援用する社会歴史的なリソースの集合である。ゆえに、通常の言語活動従事においては「われわれは多様なジャンルで話していながら、それらのジャンルの存在には少しも疑問を抱かない」となる。つまり、イデオロギー的活動に従事する当事者の視点（emic-perspective）ではジャンルの存在は気づかれない⁶。
- (4) シナリオというのは、語彙と統語の選択つまり言葉遣いに焦点を置いたジャンルの見方である。それはいわば、プロトタイプ的な言葉遣いである。ただし、バフチンがシナリオと

言う場合は、長いやり取りのシナリオではなく、（背景で可能性としての長いシナリオを潜在的に想定しながらも）ごく局所的な往復程度のやり取りのシナリオのことを言っていると見るのが適当である。そして、それを構成している要素がセリフとなる。

- (5) ゆえに、セリフは、シナリオを構成している一片のプロトタイプの言葉遣いとなる。
- (6) 一方で、シナリオの概念は、芸術の言葉を議論するときに使われることもある。その場合のシナリオは具現体としてはテキストとなり、それゆえテキストに基づく芸術的交通において特有の機能を果たすことになる。

3-3 言語＝ことばとジャンル

最後に言語＝ことばについて検討する。

以上の議論を参照して考えると、1-1の引用での言語＝ことば（*yazyk-rech*）もやはりジャンルやジャンルのリソースのことを言っているものと判断される。つまり、バフチンにとっては、沈殿した歴史的意識を染み込ませたジャンルやジャンルのリソースこそが言語活動従事に直接的に関与している知識であるということになる。

バフチンは他のところでも言語＝ことばという用語を使っている。以下の引用の傍点部である。

言語活動（言語・発話、*yazyk-rech*、筆者注）の真の現実とは、言語形態の抽象的な体系でもなければ、モノローグとしての発話でもありません。ましてや、モノローグ＝発話を産出する心的・生理的な作用でもありません。それは、ひとつの発話と多くの発話とによって行われる、言語による社会的相互作用〔コミュニケーション〕という、社会的な出来事〔共起・共存〕です。（『マル言』p.208）

1-1での引用とは異なりこの部分では、観察者視点よりもむしろ当事者視点で言語＝ことばが論じられている。つまり、当事者視点では、ジャンルは客観的な存在として気づかれることはなく、それについて具体的な

言語活動従事で援用されて発話に織り込まれて発話が実現され、それを差し向けられた対話者においては、発話をコードを解読するように理解するのではなく、特定の言語的相互行為という社会的な出来事の発生を目の前の現実として受け取るのである⁷。

このように考えると、この部分の言語＝ことばという用語法は、言語現象を社会歴史的なジャンルの側面（言語）と発話の個別性・具体的な側面（ことば）の両側面の融合であると捉えているバフチンの見方をよく表現していると見るができる。そして、ここにおいて、前節で論じたホールの見方と、バフチン自身のディスコースが重なり合うのである。

4 結び

バフチンは自身の言語学をメタ言語学（バフチン、1963/1995, p.369）と呼んでいる。それは、イデオロギー的交通の現実としての発話⁸を研究対象として、発話に織り込まれながらも発話の具体性・個別性を超越したジャンルやジャンルのリソースという超状況的なものを想定し、それを視座として対面的な相互行為から芸術的交通に至るまで言語現象として立ち現れるさまざまなイデオロギー的現象を対話主義的に解明しようとしているからである。そのようなバフチンの言語学の底流に流れているのは、ソシュール流の言語学に従っている限り、われわれは言語現象というイデオロギー的な現象に接近する術として「規範として自己同一的な言語形態の体系」以外何も手にすることができないという警告である。そして、それに代わる接近の視座として、言語活動従事に直接的に関与する知識で、状況の個別性を超えた社会歴史的なリソースであるジャンルを指定しているのである。

これまでの第二言語教育は、大きくはソシュール的なパラダイムの下に行われてきたと言ってもよく、その一方で、コミュニケーション・アプローチやプロフィシエンシー中心の教育方法などはパフォーマンス偏重の傾向があり、言語理論不在の教育方法となっているきらいがある。そのような第二言語教育の状況に対しバフチンは、言語現象はイデオロギー的現象であって、そ

のように捉えるのであれば、第二言語教育においても言語活動従事に直接的に関与しているジャンルと言語活動の本質に関わる対話性に対して正当な関心を払わなければならないというメッセージを発していると思われることができるのである。

注

1. バフチンの芸術交通論は、後の『文芸学の形式的方法』において全面的に展開されることになる。ちなみに、バフチンは、対面的な相互行為や芸術活動（芸術の産出と受容）も含めていわゆるコミュニケーションというものを包括的に（イデオロギー的）交通（obschenie）と呼んでいる。
2. しかし、『ことばのジャンル』も準備稿であって、バフチンにおいてことばのジャンルについての考察は完成には至っていない。
3. すでに第1節の引用の中でも現れているが、マルクス主義的な視点に立つバフチンの議論では、契機（moment）という語が重要な用語としてしばしば使われている。契機というのは、弁証法哲学の用語としては、「ある新しい状態へ発展するさいに、その直前のふみきり台のように、必ず通過しなければならぬ〔1つまたは幾つかの〕点」「発展のきっかけとなる根拠、あるいは要素」（『新版 哲学・論理用語辞典』）となる。バフチンの言語論においては、とりあえずは言語行使が行われる社会文化的な地点・時点と考えておくのがよいであろう。しかしながら、その用語を使用することにおいては、本稿でも論じているように、実際の具体的な地点・時点が同時に歴史的な変化や発展のきっかけにもなっていることも含意されていると見るのが適当であろう。
4. Hanks の論文では、より一般的に“metalingual function” (Hanks, 1989, p.107) となっている。
5. 研究というのは本来的に観察者視点に基づく営みである。ジャンルについては、本稿で論じたスピーチ・イベントの研究などがそうした営み

にあたる。

6. ただし、言語活動従事の当事者でも、反省や内省によって観察者視点を採ることはできる。
7. もちろん発話＝ことばを向けられた対話者だけでなく、当該の実践に立ち会った者においても発話＝ことばはそのように受け取られる。
8. 本稿ではバフチンにならって対面的相互行為のディスコースから芸術や学問のテキストまでを含む最も広い意味で発話という用語を用いている。

参考文献

- Bakhtin, M. (1981) *The Dialogic Imagination*. Holquist, M. (ed.), Emerson, C. and Holquist, M. (trans.). Austin Texas: University of Texas Press.
- Bakhtin, M. (1986) *Speech Genres and Other Late Essays*. McGee, V. W. (trans.). Emerson, C. and Holquist, M. (eds.). Austin, Texas: University of Texas Press.
- Bakhtin, M. M. and Medvedev, P. N. (1928/1978) *The Formal Method in Literary Scholarship*. Wehrle, A. J. (trans.). Baltimore: The John Hopkins University Press.
- ミハイル・バフチン (1926/2002) 「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」『バフチン言語論入門』桑野隆・小林潔編訳 せりか書房
- ミハイル・バフチン (1926/1979) 「生活の言葉と詩の言葉」『フロイト主義』磯谷孝・斎藤俊雄訳 (1979) 新時代社
- ミハイル・バフチン、磯谷孝・斎藤俊雄訳 (1927/1979) 『フロイト主義』新時代社
- ミハイル・バフチン、北岡誠司訳 (1929/1980) 『言語と文化の記号論』新時代社
- ミハイル・バフチン、桑野隆訳 (1929/1989) 『マルクス主義と言語哲学』未来社
- ミハイル・バフチン、小林潔訳 (1930/2002) 「芸術のことばの文体論」『バフチン言語論入門』桑野隆・小林潔編訳 せりか書房
- ミハイル・バフチン、伊東一郎訳 (1930-36/1996)

- 『小説の言葉』平凡社
- ミハイル・バフチン、佐々木寛訳 (1952-53/1988)
「ことばのジャンル」新谷敬三郎他訳『ことば 対話 テキスト』新時代社
- ミハイル・バフチン、佐々木寛訳 (1959-1961/1988)
「テキストの問題」新谷敬三郎他訳『ことば 対話 テキスト』新時代社
- ミハイル・バフチン、望月哲男・鈴木淳一訳 (1963/1995)『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫
- Clark, K. and Holquist, M. (1984) *Mikhail Bakhtin*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 川端香男里・鈴木晶訳 (1990)『ミハイル・バフチンの世界』せりか書房
- Hall, J. K. (1993) The Role of oral practices in the accomplishment of our everyday lives: The sociocultural dimension of interaction with implications for the learning of another language. *Applied Linguistics* 14/2, pp.145-166.
- Hall, J. K. (1995) (Re)creating our worlds with words: A sociocultural perspective of face-to-face interaction. *Applied Linguistics* 16/2: pp.206-232.
- Hanks, W. F. (1989) Text and Textuality. *Annual Review of Anthropology* 18, pp.95-127.
- Holquist, M. (1990) *Dialogism*. London: Routledge. 伊藤誓訳 (1994)『ダイアローグの思想』法政大学出版局
- Hymes, D. (1972) Models of the interaction of language and social life. Gumpers, J. J. and Hymes, D. (eds.) (1972) *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 桑野隆 (2002)『バフチン ― <対話>そして<解放の笑い>』岩波書店
- Linell, P. (2009) *Rethinking Language, Mind, and World Dialogically*. Charlotte, NC: Information Age Publishing.
- メドヴェージェフ, P. N.、磯谷孝・佐々木寛訳 (1928/2004)『文芸学の形式的方法』ミハイル・バフチン全著作第2巻 水声社
- Morson, G. S. and Emerson, C. (eds.) (1989) *Rethinking Bakhtin: Extensions and Challenges*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press.
- Morson, G. S. and Emerson, C. (1990) *Mikhail Bakhtin: Creation of a Prosaics*. Stanford, California: Stanford University Press.
- ソシュール, F.、小林英夫訳 (1915/1972)『一般言語学講義』岩波書店
- Volosinov, V.N. (1929/1973) *Marxism and the Philosophy of Language*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Volosinov, V. N. (1927/1976) *Freudianism: A Critical Sketch*. Titunik, I. R. (trans.). Edited in collaboration with Bruss, N. H. (ed.). Bloomington: Indiana University Press.
- Wertsch, J. V. (1991) *Voices of the Mind*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 田島信元他訳 (1995)『心の声』福村出版
- ※出版年が2つ書いてある場合は、前者が原著出版年あるいは執筆年で、後者が翻訳出版年である。